

Title	いのちの土
Sub Title	Life soil life
Author	栗田, 宏一(Kurita, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2014
Jtitle	Booklet Vol.22, (2014.) ,p.78- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Cosmos 2 図版削除
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000022-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いのちの土

栗田 宏一

『世界の多様性』をテーマに、足もとの土のありのままの美しさ、尊さをアートを通して伝えていく」と言い出してから20年あまり。アトリエ周辺に散らばっていた言葉を拾い集めてみることにしました。そうは言っても、記録し始めた今でもあまり気乗りしていないのは確かです。作家が言葉を発することは自分のアートの領域を狭めることになりかねません。作品に接する方々のイメージの翼をもぎ取ってしまうのではないかと気がかりでもあります。しかし、制作にまつわる諸々の思いや考えを頭の中に溜めておくことは、作品を倉庫の中にしまい込んでいるのと同じかもしれません。ここでは、アートが作家を離れて社会のものになっていくきっかけになることを期待して前向きに考えることにしましょう。

子供の頃から文章は苦手で、推敲すればするほど固まったキャラメルをつないでいくような惨めな結果になります。ここでは、ある架空の聞き手を想定して、その人に思いを伝えるために「書く」のではなく「話して」いこうと思います。

この地球上のあちこちでは同時にさまざまなことが起こり、それぞれが複雑に絡み合って歴史が紡ぎ出されていきます。この壮大な世界の歴史を学ぼうとする時、私たちはあまりの複雑さに啞然として投げ出してしまいたくなります。平面的な年表に表すには限界があります。かといってすべてを立体的に学ぶには一生あっても足りません。図書館の本を読み尽くすこともできません。ひとりの人間の歴史もそれと同じで、人との出会い、脳のなかで同時に考えているさまざまなこと、経験、すべてが複雑に絡み合いながら進行していきます。とても語り尽くせるものではありません。

しかし、アートという表現はそれらを一瞬のうちに伝えてくれる手段でもあります。一目見ただけで、一瞬その場に立っただけで、地球創世記からの時間を感じられる可能性だってあります。しかも、言葉による説明が必要ない場合

が多いので国籍、老若男女も問いません。もちろん、見る人それぞれによって感じ方が違います。それは私たち人類にとって誇るべき特質で、それぞれのやり方で世界と接することができるとも言えます。アートをきっかけにして個人のDNAが宇宙の時間と交差するのです。

誰にでも父と母がいます。一世代前には祖父と祖母。すなわち2人の祖父と2人の祖母がいます。そのまたひと世代前には、と計算していくと、10世代前には1000人以上の祖父と祖母がいたことになります。もちろん、だからといって5000年前に数億人の祖父と祖母がいたわけではありません。これはひとつのトリックのようなもので、私にはうまく説明することができません。ここで何を言いたいかという、その中のひとりでも欠けていたらいまの自分は存在しないという事実です。途方もない血の連なりが自分の中に生きています。一人一人の存在には理由があるのです。

5000年前を振り返ることによって、5000年後の世界が見えてきます。その中間地点に立っている自分はほんの些細な存在ですが、5000年後にとっては必要な存在です。もちろん自分の血をそのまま未来につなぐという意味もありますが、たとえそれができなくとも自分の思いの種子を人々の心の中に蒔くことでつながっていきます。子供たちを育む環境をサポートすることでも可能です。できることなら5000年間つないできたものをここで破壊してしまうのではなく、できるだけいい形で未来に伝えていくことがいまの自分たちが意識してやるべき仕事です。アートはそのために役立つことができます。

では、ここで言うアートとは何なのか。いきなり本論に入ってしまうような勢いですが、ある程度の定義は必要でしょう。もちろん人によって考えが違って当然ですし、反論も多いでしょう。

かつては絵画や彫刻がイコール、アートであると言われていたように思います。しかし、本当にそうでしょうか。確かにアートに至っているといっている絵画や彫刻も数多くありますが、中には単なる物体もしくは死体にしか見えぬものもあります。アートと言われるからには、作品が社会の中で呼吸していることがもっとも重要なことであると私は考えます。作者がそのことを意識して制作したか否かを見落としてはなりません。作品はそれを見る人の目を通過して初めてアートとなります。作者がこの世を去ってからも作品が呼吸していること、これは容易なことではありません。

これだけ多種多様な表現が現れている現代だからこそ、作家には強い覚悟が必要です。どんなに思考し苦勞して制作したとしても、それが単なる物体でしかないとしたら哀れな話です。自己を表現する意識を思い切って脱ぎ捨てる必要があるのです。自分はいくらでも手や足を貸しているにすぎないと素直に思えるようになって、ようやくアートが生まれ出る環境が整うように思います。あれこれ理屈をこねて説明するのではなく、ありのままを提示する勇気。

ここでは作品を見た人の心の奥深くに何か注がれるその瞬間のことを「アー

ト」と呼んでみましょう。

日本という島に日本人として生まれ、育ってきました。しかし、日本人という定義のなんと曖昧なことでしょう。確かに日本語という誇らしい言葉をしゃべり、四季折々の美しさの中で生きています。アニミズム、神道、仏教の入り交じった宗教観に包まれ、知らず知らずのうちに自然界に対する畏敬の念が育まれています。ひとくくりにはできないほどいろんな顔があり、文化があります。2000キロにもおよぶ列島にはきれいなグラデーションを成して文化の移ろいが見られます。その面白さを「風土」という言葉が一言で表しています。その土地に生きる人々が、日々さらされている「風」や、日々踏みしめている「土」に影響を受けないはずがありません。

もちろん、同じ風に吹かれ、同じ土を踏んでいたならば、みんな同じ考え方になったりするかというとなんなわけはありません。その相違はおそらくそれぞれの血の微妙な相違から来ているのではないのでしょうか。例えば、私は山梨県に生まれましたが、4人の祖父母の由来を探っただけで一筋縄で語れないことがわかります。父方祖父は宮古島の出身で明らかに南島の血筋です。外来船の寄港地であったことからポルトガルやアラブの血が混じっている可能性があります。父方祖母は由来が不明です。しかし、その顔立ちからすると半島系の血が強いのではないかと想像できます。母方祖父は基本的には数千年来の縄文人の末裔なのですが、中世の時代に乱入してきた武士の生臭さも兼ね備えています。母方祖母も顔立ちだけ見ると縄文系ですが、家筋を追っていくと大陸系となりそうです。日本人の複雑さが私の中に凝縮しています。

「風土」という言葉が出ましたが、その響きからは自然界の只中に立ちつくむ人間の姿が浮かび上がります。人間の存在感ががっちり組み込まれた言葉です。自分たち人間が自然界の一員であるという事実はちょっと考えればわかることですが、金銭を中心に動いている社会の中に埋もれていると忘れてしまいがちです。我を振り返ろうとする時にアートはいいきっかけを与えてくれます。それはアートが非日常の姿をとっているからでもあるでしょう。

では、どうして自然界の一員と認識することが必要なのか。アートの力を借りてまで。胸に手を当ててみればわかることですが、人間はあまりに自然界から離れ、傲慢になってしまっています。あたかも自然界を征服できるかのような錯覚にとらえられています。原子力発電所を制御できなくなった時の慌てぶりを見ればわかることです。もう少し謙虚になるべきなのです。「自分が自然界の一員である」と認識することは悪循環から抜け出すいいきっかけになってくれます。自然界を傷つけることは自分自身を傷つけることと同じです。私たちは決して離れられない仲なのです。どちらかを征服したり、おとしめたりする仲ではないのです。「自然との共存」という時の「自然」には自分も入っていないわけです。「風土」という言葉がそれを的確に表し、「アート」は目覚めのきっかけを作ってくれます。

自然界との一体感。その感じ方は人それぞれですがいくつかわかりやすい方法があります。その経験をもとにイメージトレーニングする事もできます。とにかく自分の肉体を消去して透明人間になってしまうのです。そうする事によって草原に吹く風が自分の中を吹き抜けていきます。自分の中を川が流れていきます。無重力状態で大地に横たわれるのです。満天の星空の中を自分の目玉だけがさまよっているような感覚。森の中、海の中も自由自在です。

この感覚を具体的にわかりやすい形で表すのがアーティストの仕事であり、腕の見せ所です。たとえある人物の肖像画であったとしても、その人物を自然界の一員ととらえ、敬っているならばその感覚が画面に表れます。逆にどんなにハイテクなメディアを用いてみたところで作家の自己をぶつけるだけの作品だったら見る人の感情移入する隙間はありません。作家の死後も呼吸を続けている作品とはその作家の自然感によるのだと思います。人の数だけ表現方法、手段が異なり、それを受け取る側も人の数だけ感じ方が違う。表現上の基本姿勢さえしっかりしていれば何をどう表現してもかまいません。もちろん、どう受け取ってもかまいません。アートはなんて自由なんでしょう。

現代アートはとってとてもわかりにくい。ほんと、同感です。もともと、アートをわかる、すなわち理解する必要などなく、ただ感じ、自分の中に落とし込めばいいのだけれど、中にはどう感じていいのかすらわからないものもあります。これほど多様で不可解なアートが生れ出てくるという事は、私たちが生きる現代がそれだけややこしくなっている証です。アートは時代を映し出す鏡だからです。

人間が自然界の一員であるという言い方をすれば、本来は手つかずの森の中で深呼吸しているだけで十分に幸せで、それ以上何かを見たり考えたりする必要はないはずです。しかし、この数千年の歴史の中で背負ってしまったもの、失ってしまったものは大きく、人間自身もややこしくなりました。もちろん、そのややこしさから優れた文化が生まれたのも事実です。森の中で深呼吸している自分、お寺の庭の、作られた自然の中でほっとしている自分、その両方もが私たちの姿です。アートが手助けできるのはその後者。まったくの自然だけでは癒されないものが私たちの中にあるのです。

表現をしていく上でオリジナリティーは非常に重要です。他の誰もやっていないこと、誰にも真似のできないこと。しかし、それを探し出すのは簡単ではありません。もしかしたら美術の歴史を勉強すればするほど身動きできなくなってしまうかもしれません。それほどに、ありとあらゆる手法、手段は尽くされています。しかし、次々と新しいアーティストが現れて、思いがけない表現を見せてくれるのも事実です。

簡単に言ってしまうえば、自分自身をとらえることができ、そのまま引っぱり出すことができるならば、それは誰にも真似のできない表現となっているはずです。もちろん、自分自身になることがもっとも難しく、どんな宗教において

も最終の目標地点です。では、どうすれば自分自身をとらえることができるのか。逆説的な言い方になりますが、おそらくは余分なものを捨て去ることが唯一の方法だと思います。どこで捨てしまったかわからない先入観、凝り固まった固定概念、それらを捨て去り身軽になることです。簡単なことではありませんが、方法はいくらでもあります。まず、旅をすることです。知らない土地を歩いて何かを見たり、聞いたりすることは、間違った認識を改め、捨て去ることもあります。何かを得るための旅ではなく、何かを捨てるための旅。そして、本を読む事。知識を得るためではなく、固定概念を溶解させるための読書。脳みそのダイエットが自分自身をとらえるきっかけになります。

ここからは少し私自身のことを話してみましよう。旅という言葉が出たので、まずはそのあたりから。自分からの意識的な旅の始まりは中学2年生の夏。鹿児島に住む知り合いを訪ねての家族旅行の帰路のことです。ひとりだけ現地に残してもらい、鈍行列車を乗り継いで山梨県まで旅をしました。およそ50時間ほどかかったと記憶しています。わざわざ鈍行列車を選んだのは鉄道好きだったからですが、結果的には正解でした。鹿児島から宮崎、大分にかけての風景、列車の中での出会いは忘れることができません。世間知らずの少年がひとりで乗っているものだからいろんな人が声をかけてくれます。しかし、その言葉が理解できないのです。同じ日本の中なのに。これは衝撃でした。それまで自分が住んでいた世界の小ささを思い知らされました。

日本を飛び出したのは24歳の冬。いまでも一緒に旅をし、生活をともにしている人と二人の旅でした。行き先はインド。どうしてインドだったのか。未だにしっかりした答えは見つかっていませんが、挫折感の連なりに後押しされた、とでもいいましょうか。それでも若者らしくはつらつと旅立ったのですが、デリー空港に到着した途端にへたり込んでしまいました。夜中に着いたのもいけなかったのですが、到着ロビーのガラスの向こう側には無数のインド人が待ち構えていました。まるで顔だけでできている壁のようです。そのまなざしはまるで私の心の底まで見透かすほど鋭いのです。このガラスの向こうへ出て行く勇気が自分には用意されていませんでした。日の出まで待ち、気合いを入れて、でも半ばあきらめて一歩を踏み出しました。

インドの旅ですっかり世界観が変わりました。いままで学んできたこと、経験、残念ながらあつという間に蒸発してしまいました。頼れるのは自分の肉体だけです。その肉体すら、ちょっと水分が足りなくなればただの干し肉になってしまいます。足元に転がっている小石や砂粒や牛の糞の存在感と自分の肉体の存在感はまったく同じで、もしかしたら自分はこの小石だったかもしれないと真剣に思えたものです。この時に感じたまわりを取り巻くものへの親近感といったらありません。

実はこのインドの旅には重い一眼レフのカメラを持っていきました。見渡す

限りの平原に身を置いてぐるりと360度、地平線の写真を撮ろうと計画していたのです。ところが実際に身を置いてみると、笑い出してしまうほどに滑稽な行為なわけです。それで自分の存在を表現しようなどということは。結局のところインドでこのカメラを取り出したのはただ一度。地平線どころか、地べたです。自分の足がふらふらと平原を歩き、さまざまなものに出会う様子が36枚撮りフィルムにムービーのように残っています。

靴底に挟まった小石を集めたのもこの旅の時です。インドの安宿はたいいてい靴がコンクリートになっていて、靴底に小石が挟まっていると嫌な音がするんです。そこで一日の終わりに小石はずしをしますが、今度はその小石が捨てられない。あまりに愛おしくて。少なくとも自分の歩みと重なって、何かの縁あって一日をともしたわけです。糞ばかり踏んでしまってあまりに汚い日をのぞいて旅の間中採集を続けました。

旅先での一日は日本で過ごす一年分くらい凝縮されていると感じます。時間の流れ方が全然違うのです。それは、たとえ洗濯しかなかった一日であっても、郵便局に一枚のはがきを出しにいっただけの一日であっても。新婚旅行を装って知人や親戚から集金してから出かけた旅は結局のところ500日を要しました。はじめから500日も旅することは想定していませんでした。しかし、旅の資金は限られていましたからなるべく節約して少しでも長く遠くへと心がけました。二人そろって貧乏性なのは幸いして、お金を使わないことが快感になっていきました。お金を使わない方が現地の人と近いところにいられるのです。例えば一泊1万円もするホテルに泊まっていて彼らの生活が見えるでしょうか。国にもよりますが、一日にひとりが見えるのはホテル代、食費、移動の費用も含めて1000円と自己制限をかけました。

日本からは船で上海へ。そこから列車でウイグル自治区に入り、タクラマカン砂漠、パミール高原をバスで旅してパキスタンへ。仏教が日本までやってきた道をさかのぼったわけですが、その土地まで一本の道でつながっていたことになぜか感動したものです。インドに入って半年間の滞在。北のラダックから南のタミルまで。いったん東南アジアに足を伸ばして日本に視線を向けたものの、西アジアへの思いは断ち切れずに、思い切ってトルコへ。イラン、エジプト、ギリシャとかなり欲張ったところで資金切れ。500日ぶりに帰った日本は本当に愛おしく、しかし溺れかけている子供のようにも見えたものです。旅の最中に考えていたこと、経験したことを何かしら社会に還元できないものかと真剣に思いました。

旅先ではいろいろな国から来た旅人と出会います。お互いの国のことなど話しながら交流するわけですが、あまりに日本のことを知らない自分に愕然としてしまいました。語学力がないことを理由にごまかすこともしばしばでしたが、本当に知らないのです。次の旅のためにアルバイトをするかたわら、できるだけ時間を作って日本の旅も始めました。もともと民族学者になりたいと思った

こともあるくらいなので、風習、言葉、食べ物、家の作りなど細かなことまで旅先で見えてきましたが、日本もそれに劣らず面白いのです。アジアのみならず、アフリカや中南米にまで足を伸ばすようになると、更に日本の面白さが際立ってきます。考古学的なことから現代の風習まで、とても交流があったとは思えない地域同士で同じようなことをやっているのです。人間の考えることにそう大差はないともいえますが、自然界を敬い畏れながら暮らしていると同じような祭りや呪いをやったりするのです。

日本各地を歩くにつれ、自分の生まれ育った地域にも独特の文化があることが再認識できました。衝撃的だったのは山梨県の特に関東に多く残る丸石道祖神です。子供の頃から見慣れていたものでこんなものはどこにでもあるものかと思っていました。単なる丸い自然石を祀っただけのものですが、調べてみると数千年前から続いていて、いまはこの地域に限って残っているのだそうです。いまは道祖神、少し前は繭に見立てて養蚕の神様。それ以前は、おそらく月とか太陽の象徴だったのでしょう。ミケランジェロは大理石の中に女神の姿を見出して「いますぐ彫り出してあげる」と言ったそうですが、私たちの文化では、石の中に神を見たのなら決して鑿を当てません。明治時代以降のものは人工的に丸く成形したり、「神」という文字を刻んでしまった石もあるのですが、それらに神々しさはありません。心の通わぬただの物体です。かつて宝石研磨を学んだ時に感じた違和感はこれだったのです。あるがままの姿を尊び、そこに宇宙観を感じる文化。そんなところに生まれ育ったことを誇りに思える出会い。外側から見たからこそ見えた世界でした。

いろんな国を旅する途上で、滞在した街の足元の土をひとつまみだけ拾ってポストカードにセロテープで貼り、日本の自分宛に送り続けていました。地球儀で見てもわかるくらいの大移動を繰り返していれば、土の色が変わるのは当然です。ところが日本に帰って、改めて自分の家の庭、隣の畑、川の向こう、丘の上と拾って比べてみるとたいして離れていないのにすべて色が違うのです。極端な話、右手で握った土と左手で握った土は既に色が違うのです。しかも、驚くほどきれいです。自分が30年あまりも無意識に踏みつけてきたただの土がこんなに美しいなんて。まさしく足元をすくわれる思いでした。

私たちは幸せになるために生きているのだと思います。自分のためにも他者のためにも未来の子供たちのためにも今の自分に何ができるのか。才能があれば政治家になるのもひとつの手だし、経済力が伴えばもっと心強い、文章や話が上手ならば説得力もあるし、とあれこれ考えてみましたが急に何がができるようになるわけではありません。ちょうどその頃は美術の分野にも変化が起きていて、絵画や彫刻といった「もの」を見せるやり方から、生き方や考え方といった「こと」を見せるやり方が分離独立していく時期でした。美術大学を卒業したことが前提ではなく、オンリーワンを持っている人が立ち上がっていく分野に見えたのです。

アートを通して社会に意見していこうと思った時に私がとった方法は、拾っ

た土をそのまま見せる、ということです。あえて造形表現からは距離を置きました。なんと唐突でぶっさばうなことでしょう。しかし、自分の驚きを素直にそのまま見せる、それが一番自分自身に嘘をつかなくていいことになります。展覧会そのものよりも人との出会いの方が重要だと考えていたこともあり、どこか確信犯的な見せ方でもありました。また、その美しさを知らずに長年踏みつけてきたことへのお詫びの気持ちもありました。

純粹に「美しい」と感じたことから始めた土拾いですが、以前からもやややっていたコンセプトがびたりとはまったのも事実です。手元に集まった色とりどりの土を前にして、「これだ!」と思った瞬間は、遠くの地平まで光がずっと差したような心地よさでした。

まだインドへ旅に出る以前の話ですが、毎月満月の頃に浜辺でパフォーマンスをしていたことがあります。慣れない都会の生活で身体を壊し、おまけに手術も失敗してしまい、左半身が一時期不自由になりました。このあたりで肉体的表現に出会い、当時身近にいたアーティストにも刺激されて、自分の無様な肉体をさらすようになりました。パフォーマンスといってもほとんど動かずに立っただけです。満月の頃は大潮で、引いた時と満ちた時とでは高さ2メートルくらい差があります。潮が引いて水鏡になった浜に立ち、潮が満ちてくるのをただ待つのです。徐々に足に水がつき、腰まで来て、胸まで水没します。この様子を見ることで、月の引力を感じる、というのがこのパフォーマンスのコンセプトでした。宇宙の複雑な動きがこうして目に見える形で日々展開しているのに、改めてじっくりと見ることはあまりありません。この宇宙の動きに人間も影響を受けないはずはないのです。こうして「人間は自然界の一員である」というテーマが身に付きました。

その後、リュックひとつで世界中を旅してまわり、へとへとになって帰ってきたところで「土」と出会ったのです。自分が自然界の一員であるということを知りやすくて教えてくれ、しかもぐっと握れるものが「土」だったわけです。

私が改めて語るまでもなく、ひと握りの土には地球上のすべての生命、物質、元素が含まれている可能性があります。それらをひと握りできるものを他に知りません。石や砂はいつてみれば地球そのもののかげらです。土はそれらの粉の中に動物や植物やありとあらゆる有機物が混合しています。すなわち、自分たちのかけらも混じっているのです。土の色の違いは雨や風、太陽光の長年にわたる働きかけによるものです。あたりを取り巻く四大霊によって色が変わるのです。「土に還る」という言い方がある以上、大地との関係性は私たちにあらかじめ内包されています。しかし、土が無くては生きていくことはできないと頭ではわかっているはずなのに、ずっとないがしろにして、時には蔑んできました。いったん放射能が漏れ出せば、まるで土が犯罪者であるかのように取り除き始めます。そんな時にアーティストという人種はひねくれていて、人が見向きもせず、蔑み、邪魔にしているものを、頭を下げざるを得ない状況に持つ

ていけないかと考えるのです。

実際に土を展示する際、参考になったのは以前から親しんでいる俳句の手法でした。17文字の中に季節感をベースにして、音も匂いも色も触感も空気感も感じさせる空間世界を作り出すのは驚異的です。定型だからこそ、更に世界観が際立ってくるのです。最小の定型の中に宇宙を作り出す。これは日本人が最も得意としていることかもしれません。相撲で負けることを「土がつく」。面目つぶしは「人の顔に泥を塗る」。こんなふうにいわれてきた土を、神前に捧げるかのように生成りの和紙の上のせて奉る。すべて定型で並べることによってそれぞれの土の色やテクスチャー、風土や歴史までもが浮かび上がります。

土を100ほど拾い集めた頃、自分の足元すら見ていなかったことに愕然とし、こんなに美しいものがごく身近にあったことにただ驚いていました。土が1000くらいになった時には、これは奥が深そうだと、という期待感と、大変なことに手を付けてしまったな、という戸惑いが交錯していました。10000近くになった時には、もうひたすら頭を下げてひれ伏すしかありませんでした。自然界にはかなわないという思いとともに、この凄さを人に伝えていかなければいけないという使命感も湧いてきました。こんなばかばかしいことをいままでにやった人いるとは思えません。もちろんこれから先も。

はじめの頃はただランダムに採集して「きれいだよ」と見せていたにすぎません。それが「風土」という言葉と結びついたとき、採集した地名を記録するようになりました。日本には「産土神」という言葉もあるくらい、生まれた土地の神様を尊ぶ信仰があります。誰でも自分の生まれた場所、住んでいる場所の土が展示されていたらうれしいものです。それがその人にとっての入り口となるのです。だとしたら、すべての人に対して入り口を作るべきではないか。これが日本全国全市町村での土採集プロジェクト「ソイル・ライブラリー」の始まりです。途中で平成大合併という改悪がありましたが無視して、全部で3233市町村のうち、この20年間で9割9分までを採集しました。すべてを勢揃いさせて、すべての人に対しての入り口を用意してお待ちするのがこのプロジェクトの目標です。「ライブラリー」と呼んでいることもあって、あまりアートプロジェクトとは思われませんが、むしろ、そのあたりも狙いです。本の森に迷い込んでそれぞれの人が一冊を手にする図書館。みんなが違う一冊に出会います。しかも敷居が低い。そんなあり方が理想です。ひと握りの土を紐解いていくと、地球の歴史から私たちの生活との関係性まで、ありとあらゆる入り口が広がります。ひと握りの土は一冊の本と同じだと感じているのです。

通常は美術館などでの展示は期間が限定されてしまいます。インスタレーションとも呼ばれるように、いったん設置してある期間展示をしたら撤収するしかありません。そんな作品の場合、人に見てもらって役目を終えたなら、土たちにはご苦労様と声をかけて、元の大地に戻すようにしていました。作品の種類によってはこれからもそうしていくでしょうが、いま生きている自分たちだけ

がその美しさを楽しんでいて果たしていいのだろうか、とあるとき思い始めました。未来の子供たちにも伝える責任があるのではないか。かつてこんな人がいて、こんなことをしていった、などと写真を見せられても本物の美しさは伝わりません。実物の力が必要です。

1970年、大阪で万国博覧会が開催されました。小学校2年生の時です。親に連れられて夢の世界を訪れました。初めて新幹線にも飛行機にも乗りました。しばらくして閉幕を迎え、名前を暗記するくらいに大好きだったパピリオンが次々と壊される光景がテレビに映りました。まだ作ったばかりなのに、壊す理由がわかりません。親に聞いてみると「残しておく方がお金がかかるから」という答え。これで一気に夢が覚めてしまいました。それからは何を見ても、きつと子供騙しだろうと疑ってかかるほどにひねくれてしまったのです。唯一の本物は、近所の畑で拾える縄文土器のかけらでした。子供ですから本当に時間の感覚があったのかどうかはわかりませんが、5000年前の土器のかけらが畑に落ちているという事実は衝撃でした。5000年間ここに落ちているということは5000年間誰も拾わなかったということです。要するに作り手使い手から数えて5000年ぶりに触った人の手が自分の手なのです。大人になったら、絶対に子供騙しだけはしたくないと強く思ったものです。

未来の子どもたちに本物を伝えるために、拾った土をビンに入れて少しずつ残すようになりました。一種のタイムカプセルです。もちろんいま生きている人たちへの提示も続けていきますが、徐々に仕事の重心を未来に向けて傾けていきたいと思っています。もちろん、いまの状態をなんとかしなければ未来はないわけですし、現代社会に絶望しているわけでもありません。もっとも、絶望寸前であると感じているのは多くの人と同じです。アートの持っている思いがけない力、それより何より、自然界が持っている驚異的な回復力と癒しの力に期待しています。そのためにも、これ以上、人間の節度のない欲望の犠牲にはなりません。

ビンに入れることによって土の持つ質感や時間は封印されます。そのことは有機的な親しみから遠ざけてしまうことになるのですが、逆にイメージーションは刺激されます。具体的なことを消すことによって、ビンの中の物質そのものと対峙することになります。わずかな手がかりをもとに自分でストーリーを作っていけるとも言えます。もちろん採集した地名の表記は重要だと考えています。それは見る人との関係性、その土地に生きている人との関係性からものです。こうなってくると、果たしてこれはアートなのか、博物学的な資料ではないか、という声も聞こえてきます。自分でもうまく説明できないほど、この両者ははっきりと分けることはできないと感じます。少なくとも、どんな科学者でも不思議さ、美しさ、発見の驚きや感動からスタートしていることは間違いありません。それはアートでもまったく同じです。できることなら、あまりに離れすぎてしまったアートとサイエンスの狭間を橋渡しするような仕事に成長してくれるとうれしいのです。子どもたちが作品に接する時の目を見ればわか

ることです。彼らはアートとサイエンスを分けてはいません。

ここまでは「どうして土を捨てるようになったのか」それと、ちょっと飛ばしすぎましたがこの仕事はどこへ行こうとしているのかについても話したつもりです。それでもまだ漠然としていることもありますから、少し具体的なことに入っていきます。

ただ土を捨てるとはいってもどこかしら捨てる場所は選んでいるわけでそれはいったいどんな基準なのか、よく尋ねられる質問です。実を言うともあまり特別な場所で捨てているわけではありません。もちろんはじめの頃は赤や黄色などカラフルな土が露出しているところを中心でした。土砂崩れや工事現場も狙いました。しかし、徐々になんでもない畑や田んぼの土にも微妙な色の違いがあることがわかり、それこそ手当たり次第に捨てるようになったのです。結局のところ、この地上に汚い土はありません。すべての土が美しくて、愛おしいのです。そしてひと握りずつ色が違います。この地上は四方八方に微妙なグラデーションで色が移ろい、彩られているのです。どの土も美しい以上、採集する場所を選ぶ必要はありません。別に地質学的な興味があるわけではありません。そこに人間が暮らし、土にその生き方が映り込んでいるという事実が重要なのです。全市町村の土集めという目標ができてからは、ひとつの街でどこでもいから最低一カ所。複数箇所捨てる場合は、東の端と西の端とか、なるべく離れた場所です。なんとなく惹かれる地名があったらその場所で。温泉や鉱山があったらちょっと寄り道。北海道のような広大なところでは10キロごとに車を止めようなどという決めごとを作ることもあります。基本的には車が安全に止まれるスペースがあること。畑と田んぼでは明らかに土が違うので、その両方がある場所は効率がいいわけです。あまりに単純な作業に陥った時には、空海が見た土、芭蕉が見た土、などとテーマを決めて彼らの足跡を追う旅を試みたりもします。

人間の欲望には際限がありません。次々と目移りして欲しくなります。それは土拾いでも同じことです。例えば他ではなかなか見かけない色の土が見つかったとします。どうしてもたくさん欲しくなります。それが滅多に來られないような土地だったらなおさらです。はじめはほんのひと握りのつもりが、土のう袋になり、しまいにはトラックを借りようなどという話にもなりかねません。そこで、自分への戒めとして、片手でひと握りのみと制限をかけています。量が必要なわけではありません。自分がその土地を踏んで、土をひと握りしたという事実だけでいいのです。

本で読んだのですが、1センチの土ができるのに100年かかるそうです。これを知ってしまうとおいそれと土を動かすことはできません。掘り出すことはせず、表層だけをすくい取るように気をつけています。生活のためもある程度10年ほど遺跡発掘のアルバイトをしていたことがあります。それだけに地中には

どんな時間の堆積があるのかは身に付いているつもりです。いってみれば、掘ってしまうことは過去の時間を奪ってしまうことです。それでも、重機がうなりながら土を動かしている姿を見ない日はありません。目を覆いたくなる光景ですが、できるだけ勇気を出してそんなところにも足を踏み入れるようにしています。数日後にはコンクリートで窒息死させられてしまう土の救出のためです。この時も涙を飲んでひと握りです。自分がひと握りすることで未来の子供たちにも伝えられると思うと、これはやりがいのある仕事です。

土は拾ってきた状態ではほとんどの場合、湿っています。そのままにしておくと土の中の生物が窒息してしまうので、家に戻ってきたらすぐにビニール袋から取り出して風に当ててあげます。現地で土に触れている瞬間も好きですが、少しずつ乾いていく様もまた美しく、その場に座り込んでしばしば見とれてしまいます。ひと握りの中に四大霊が宿っていると実感できる時間です。土の中の虫たちは移動を始め、葉っぱや根っこは身体を反らせながら浮き立ってきます。完全に乾くまで下に敷いた新聞紙を何回も替えてあげます。まるで赤ん坊のおしめを替えるようなものです。ますます親密な関係になっていきます。

作品にもよりますが、土のラフな表情を見せる場合、葉っぱや根っこ、小石などを取り除きます。この時はピンセットを使いひとつひとつ摘み取っていくのですが、ここまで手をかけてあげると身内のような親しみです。サクサクしていてラフな状態が残しにくい土はこの段階でふるいにかけてしまいます。この作業も大好きで、ふるいの下に表れる土の色、柔らかな触感、それとふるいの上に残る砂や小石、根っこなども美しさが際立ちます。これらの作業はかなり人為的なことで、自然状態では決して見えないものが見えてきます。なるべく暴力的にならないように気をつけていますが、土にとっては迷惑なことでしょう。それでも、展覧会場に並べられ、多くの人に賞賛されると、しまいには土たちも誇らしげに胸を張って役割を果たしてくれているようにも思えるのです。

若い頃、銀行になんか貯金しないで自分自身に貯金するように、とある人に言われたことがあります。何でも見て、食べて、旅をして、自分につき込むようにしてきました。むしろそのためにアルバイトを繰り返していたとも言えます。そんなこともあって未だに銀行にはわずかな貯金しかなく、身軽です。何かあった時にに向けて備えるよりは、何かあっても向き合えるように備える方が賢いと考えます。

土採集には車を使いますから、想像以上に経費がかかります。ガソリン代、食費。ほとんどは車中泊ですが、たまにはホテルにも泊まります。プロジェクトに向けての土採集の時は経費を出してもらえる場合もありますが、基本的には自分でまかなわなければなりません。絵画や彫刻であればいつかは売れる可能性もありますが、この仕事の場合はあまり期待できません。でも、いま思えばそれは幸せな状況だったと思います。浮き沈みを気にすることなく、淡々と

した蓄積のみがこの仕事の生命ですから。アーティストがどうやって食べているのか、おそらく誰にとっても興味のあることです。しかし、ひっくり返してみれば、誰しも同じようなものだと思います。違うのは価値観だけです。

中学生の時に、父親に「将来どんな仕事をしたらいいだろうか」と相談したことがあります。「お前は手先が器用だから大工とか植木屋とかがいいんじゃないか」と冗談っぽく言ったあと、「お金を触る仕事だけはやめろ」と語調を強めました。父は銀行員でした。おかげでこんな生き方になりましたが、いまでは父に感謝しています。

私の作品は仏教的であるとしばしば言われます。海外では「ZEN」とか「MANDARA」という言葉が使われることもあります。宗教色を帯びることで妙に観客との距離が離れてしまうことを恐れているため、なるべく自分からは宗教的匂いのする言い方はしないようにしています。しかし、日本で生まれ育ち、アジアの国をさんざん旅した以上、まったく影響がないとは到底言えません。というか、かなり影響を受けています。ただし、影響を受けているのは仏教だけではなく、私たち日本人なら誰しもそうであるようにアニミズムや神道も深く関わってきます。それに加えて、アジアの旅の途上で出会ったヒンドゥー教や、イスラム教、近年ではキリスト教も当然関わってきます。

私の作品では、例えば100ではなく108、50ではなく49といった数字が使われます。108は煩惱の数であり、49は輪廻、もしくは成仏に必要な日数です。床面に正方形に設置する時には3×3を基本として、例えば9×9、27×27といった構成をします。これは明らかに曼荼羅の構造そのものです。土を円錐状に盛った作品も表れますが、これは須弥山といってもいいでしょう。四角い生成りの和紙の上ののせるのはどう見ても神道スタイル。そもそも自然界からお借りした土をそのまま手を加えずに提示するのはどう見てもアニミズム。こうしてとてもNOとはいえないほどに日本的宗教性に影響を受けています

ある仏教寺院の僧侶が「お寺は自分自身を見つめるためにすべての人に開かれた場所」という言い方をしていますが、それに倣えば「アートは自分自身を見つめるためにすべての人に開かれた装置」とも言えます。おそらく宗教もアートも目指しているところは同じなのだろうと思えるのです。

日本での活動と平行して行っているフランスでの活動もとびとびではありますが10年を迎えました。どうしてフランス人がこの仕事を好きなのか。明確な答えは見つかっていませんが、日本でいうところの「風土」に非常に近い「テロワール」という言葉を大切にしていることもひとつの理由ではないかと想像しています。

フランスではアーティストがひとつの職業として認知されています。すなわち社会の一員として受け入れられているということです。契約書にサインをした以上、仕事を完遂しないとペナルティーもあるわけで責任もあります。でも、そのぶんやりがいがあります。更にいえば、リスペクトされることによって仕



《mille terres, mille vies》

2009年

サントル州を中心としたフランス各地の土1000、和紙

2.5m×25m

ノワールラック修道院(シェール、フランス)

事はより充実して高みを目指せます。日本では、私たちは職業区分の上では「その他」もしくは「無職」となります。責任感がないといい仕事は生まれてきません。文化の土壌を育てるためにも、アーティストに責任ある仕事を与えるべきです。

10年も続けている割には不思議なくらい作品スタイルがフランス文化に影響を受けることはありません。もちろん学んだことはあります。例えば天井までの高さが10メートル以上もある教会で展示するようなことは日本ではありません。教会そのものが天を意識する構造になっているのですが、その床面に作品展開することによっていかにその上の空間が大切であるかを身に染みめています。天は地があるからこそその天、地は天があるからこそその地。日本では天と地、そして人間の存在は霧のような状態で一体化しているように感じます。フランスでは天と地がはっきり別れていて、その狭間に人間の存在があります。これも風土からくる違いなのです。やっぱり知らないうちに影響を受けているのかもしれない。

この20年あまりを振り返ると、浮かんでは消え、やり始めたもののいつの間にか消滅したプロジェクトもずいぶんあります。そんななかであまり表舞台には出てこないけれど、やめられないことがあります。それはやめてはいけないという意味ではなくて、一度何かを始めたならやめられなくなる私の性格的なことからきています。これらには日記的な側面があって、自分にとっては表に出ている作品よりも私的な親しみがあります。

満月の日の浜辺でのパフォーマンスについては既に話しましたが、その後も満月は気になって仕方がありません。女性は身体のリズムで月の満ち欠けを感



《INNOCENCE》

2011年

2004年に採集した福島県飯舘村の土、ガラス瓶

応できる仕組みになっていますが、男というのは惨めなもので、相当意識しないと宇宙のリズムの中に入っていくことができません。そこでカレンダーに満月の日を書き込み、その日には何かひとつの行為をしようと考えたのです。何でも良かったのですが小石拾いです。土ではなく小石だったのは、それがひとつの星でもあるからです。土はその集合体なので、ひとつの社会ともいえます。普段はマンツーマンよりも社会の方がつきあいやすいので土を対象にしていますが、満月の日だけは小石です。このことによってようやく月の引力を感じる準備ができるのです。

もうひとつはポストカードに土を貼って送るプロジェクト。海外を旅している際は滞在した街での採集ということにしていますが、2003年からは日課になりました。毎日どこかで屈んで土をひとつまみしています。目的地のない巡礼旅のような気分です。何か別のことを見つけない限りおもしろくてやめられそうにありません。

2011年3月、一生忘れることのできない出来事が起こりました。大地震とその後の津波をきっかけにした原子力発電所の爆発事故のことです。この時の焦りと戸惑い、悔やみと情けなさは忘れることができません。アンドレイ・タルコフスキーの映画は私の作家人生の基礎を築いてくれたといってもいいのですが、実は最後の作品《サクリファイス》だけは未消化なままでした。それがこの時には自分たちのこととして全身全霊に叩き突きつけられたのです。病魔に

冒された身体を支えながら、それこそ命がけで発してくれたメッセージを私たちは見過ごしてしまったのです。

すぐに《INNOCENCE》という作品を作りました。イノセンスにはいろんな意味があって、無邪気、無防備、無垢、無実、無罪などです。こんな時は英語のタイトルはいろんな意味を総括してくれるので便利です。フランスバージョンと日本バージョンのふたつを作りました。フランスバージョンは一本のピンに福島の土（飯館村）を入れただけです。これは汚染される以前に採集したもので、いってみればこれから先、採集することができない土です。私たちはこの土の声を聴かねばなりません。土から学ぶ姿勢を持たねばなりません。12世紀のロマネスク教会に展示され、この一本を囲んで人々が語り合いました。日本バージョンは4本のピンでできています。一本目には広島土、二本目には長崎土、三本目には福島土、そして四本目は空です。自分で作っておきながら涙が出るほどに恐ろしい作品です。作品に社会性を込めることは実はあまり好きではありません。こんなものは作りたくなかったし、今後は絶対に作りたくはありません。

この絶望的な世界で暮らしていても、目の前の木々の揺らぎや鳥の鳴き声には深い幸福感があります。木は一本ずつ姿が違い、鳥ですら一羽ずつ囀り方が違います。この世界にはふたつとして同じものはありません。それをひと握りの土から教えてもらいました。そのことはそのまま私たち人間にも当てはまります。同じような姿形をしていても、みんな顔が違い、考え方も違い、それぞれの歴史も違います。そして地上に汚い土がないように、人間も元を正せばそれぞれが妙なる存在なのです。赤ん坊の姿を見ればわかることです。土の仕事を通して言っていきたいのは「世界の多様性」です。あいつの考え方はわからない、だから排除しよう、ではなく、自分とは違うけどああいう考え方もあるんだな、と思えればいいのです。それぞれの違いを認め合っておもしろがれば、無駄に争う必要はありません。多様な世界の唯一の存在として生かされていると自覚すればいいのです。争わない知恵を持ちましょう。

石庭で有名な京都の龍安寺には、禪の神髄ともいわれる言葉が刻まれた石のつくばいがあります。「吾唯足知」。私は満足することを知っているだけです、というような訳になるのでしょうか。今更私が持ち出すまでもありませんが、この言葉をかみしめながら少しでも未来につないでいけるように仕事をしていきたいものです。

(2013年7月8日 シャマランド、エソンヌ、フランス)

(くりた こういち・アーティスト)